

五ヶ瀬町

恵良八幡の伝説

五ヶ瀬町は
ひむかの中でも
標高の高い町です



特に西側は阿蘇五岳がそびえ
五ヶ瀬町内にも
標高1000mを超す山が
連なっています

厳冬期には雪が降り積もり
日本最南端のスキー場も
あります



時に厳しく
猛々しい顔を見せる
山々ですが

春は一斉に
高山植物が芽吹き
初夏には
新緑が輝きます



そんな
美しい町
五ヶ瀬に

四百年ほど前
恐ろしい事件が
おきました



それは戦国の世――

天正15年(1587)
豊臣秀吉の率いる軍が
九州へ上陸し

九州の豪族たちは
敵味方に分れ
戦ったのです



天正18年(1590)
秀吉が天下を統一
九州の領地を
主な豪族に
分配しました

そのとき

高千穂の土地が
三田井氏のものが

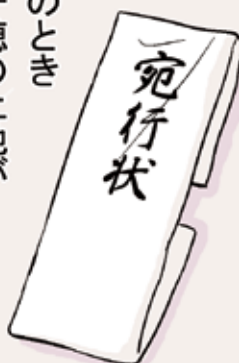
高橋氏のものか
宛行状にきちんと

明記されておらず
この両家の間に争いが
起こったのです

高橋氏に討たれた

三田井城は

天正19年(1591)に落城

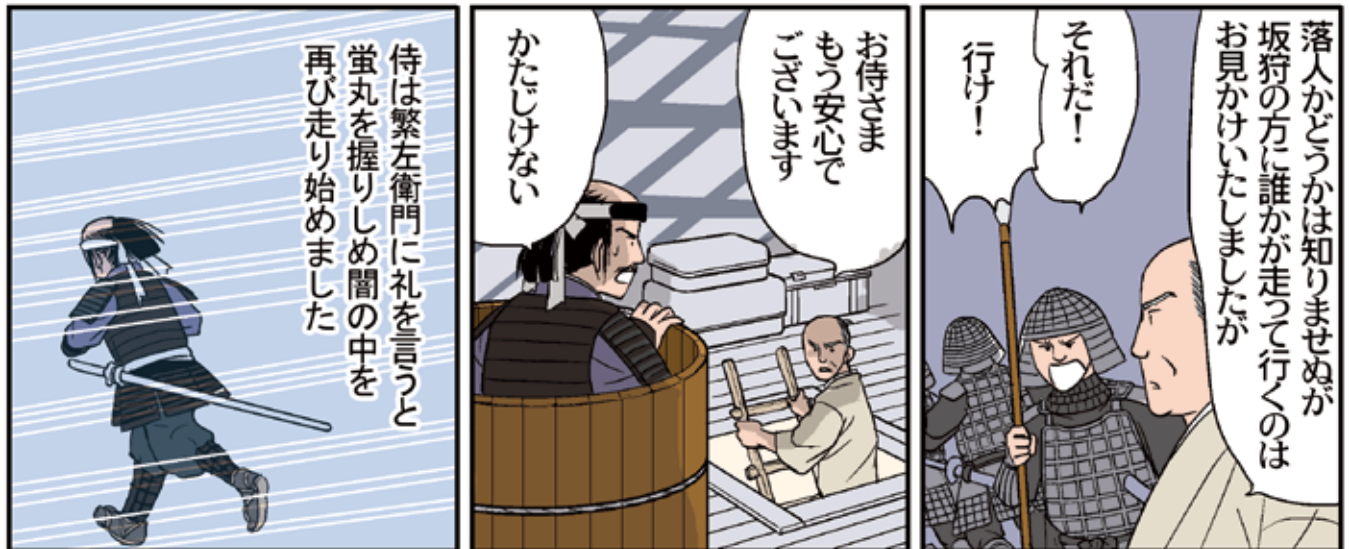
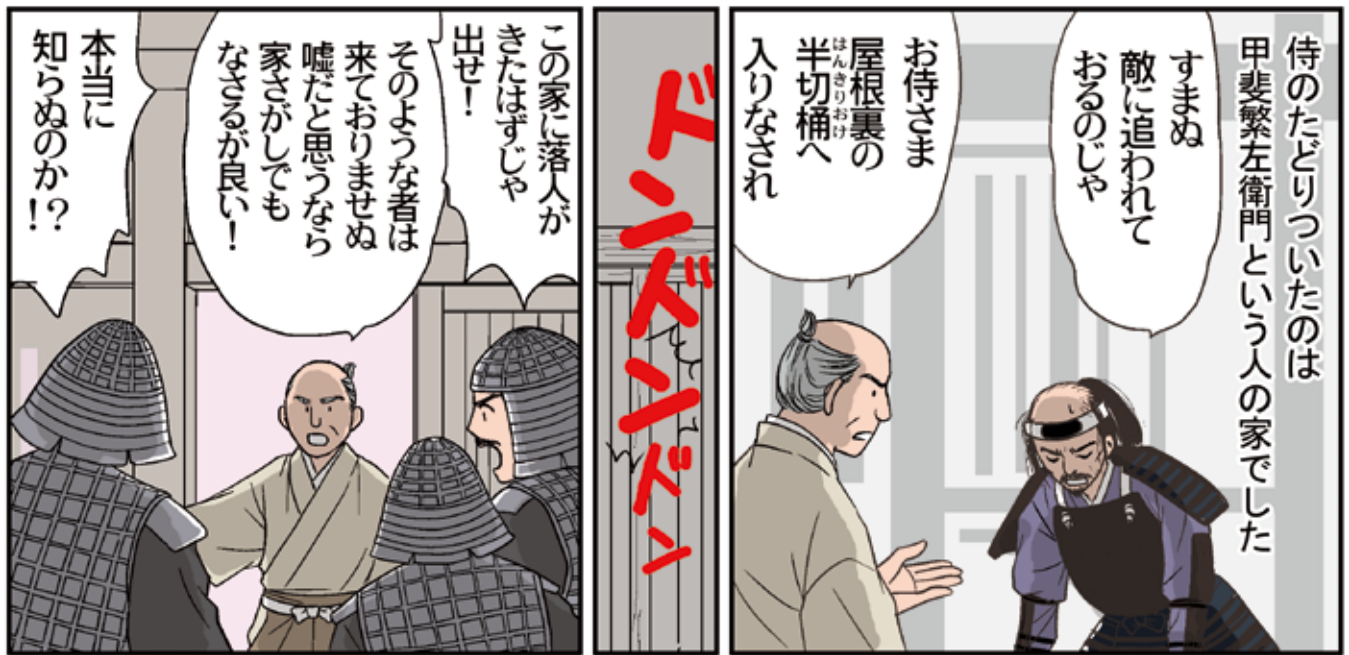


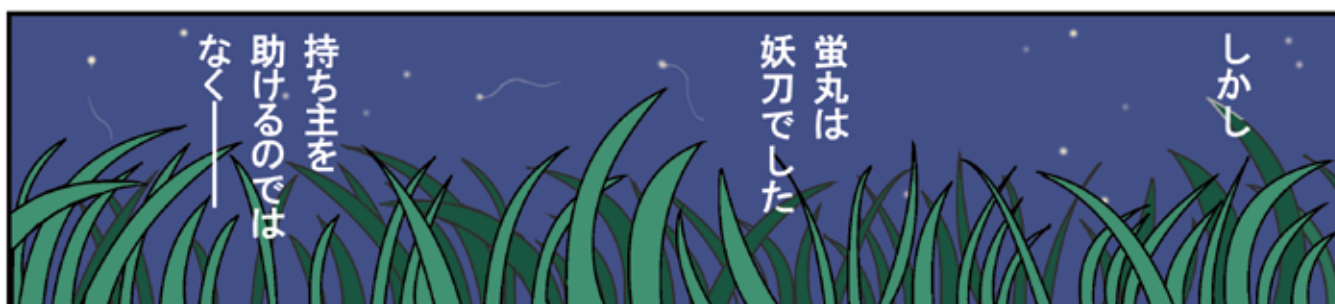
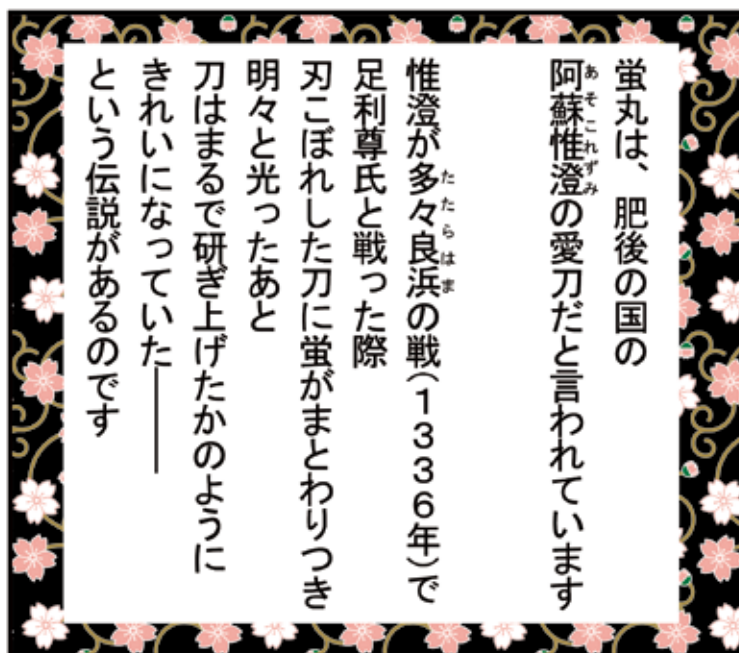
内の口という所へ来たとき
闇の中、
一軒の家の灯を見つけました

そのとき
三田井の侍が追手から逃れて
五ヶ瀬へ向かいました

腰には
蛸丸はたけまるという名刀を
差しています







持つ人を
翻弄する刀なのです

闇の中で
光る刀に
敵が気づきました！

おお！
あそこに
いるぞ！！

侍は追手の兵に見つけられ
その場で首をはねられ
殺されてしまったのです

それがこの
恵良八幡神社です

そして村人たちは
三田井の侍をあわれに思い
祠を建て手あつく葬りました

ここにはそのときの
年号の入った石灯籠や碑が
今もしっかりと残っています

これが五ヶ瀬に残る
恐ろしくも不思議な伝説
なのです

最大の謎は
蛍丸はいつたい
どこから来て
どこへ消えたのか」です
そして
蛍丸を持つ人は
みんな不幸に
なっているのではないか
という疑問もあります

これすみ
惟澄の場合も

一旦は刃こぼれの直った刀で
敵を斬ることができたでしょうが

でも

この多々良の浜の戦いでは
結局尊氏側に敗退します



一度は勝てる希望を
もつたのに
結局負けてしまう…

なんと残酷なことを
する刀でしょう…



惟澄亡きあと

蛸丸は代々阿蘇家に伝わるのですが
阿蘇氏は分裂をくりかえし
しだいに衰退していくのです

うーん

やっぱり
不幸な
流れかも…



蛸丸の作者は
来国俊と云われています

蛸丸の茎に
「永仁五年三月一日」の
銘があったことから
製作されたのは
1297年
鎌倉時代です



それから
いったい
何人の手に渡り
戦国時代に生きる
阿蘇惟澄の元へ来たのか

さうさー！

阿蘇家の蛸丸が
どうやって三田井の侍の手に
渡ってきたのか
謎は深まるばかりです



昭和六年(1931)には
国宝に指定されたのですが

太平洋戦争後、
GHQによる
刀狩りの中で
そのゆくえが
わからなく
なりました



刀狩りで
集められた刀は
ガソリンをかけて燃やされ
多くは海に捨てられたとのこと
その中に蛸丸も入っていたのでは
ないかと言われています

美術品としての価値もある
日本刀が破壊されたのは
悲しいことです

蛭丸を持つ人は
不幸になる…
伝わる家は衰退する…

そして国は滅亡する…
のだとしたら

人も国も翻弄する妖刀蛭丸が
日本から消えたのはもしかしたら
幸せなことなのかもしれません

戦後日本が
驚異的な復興を遂げたのは
蛭丸が日本に存在しなかったから！

なんてことも
考えられませんか!?

妖刀蛭丸——
いったいどこに
あるのでしょうか

侍が斬られた
という場所には
今は青々と草木がしげり
作物が実っています

この場所から
蛭丸の邪悪な力は
もう感じられませんが
侍を助けた
村人たちの優しい
気持ちは伝わってきます

もしかしたら
蛭丸が五ヶ瀬の厄を
全部もっていつてくれたの
かもしれません

美しい緑を守る
平和な町に
妖刀は似合いませんね！

森からの贈りもの

日本は森林率の高い国です。国土の約7割が森林で、フィンランドに次いで世界第2位。これは誇るべき数値だと思います。



森林が多いということはどういうメリットがあるでしょうか。平地が少ないから工場が建てられない、家を建てるのも大変だ、などと思わないでください。森林は私たちに、生きるための必需品をブレゼントしてくれているのですから。

植物は光合成によって二酸化炭素を吸収し、酸素を吐き出してくれます。森は私たちに酸素という贈り物をしているのです。

それだけではありません。森には落ち葉が積み重なっている層があります。腐葉土と呼ばれるこの層が厚ければ厚いほど、水分が多く蓄えられます。そしてその層はやがて微生物や、ミミズなどのさまざまな土壌生物によって分解され、土になるのです。

森のことを「天然のダム」と表現することがあります。それは、山に降った雨が腐葉土の層に蓄えられ、一気に流れないからです。

森のない岩山と比較してみましょう。

岩山に雨が降ると、降っただけの量がドツと流れ出し、海へ注ぎます。土砂や小石も一緒に流れて、大災害が起きるかもしれません。

でも、手入れされた森のある山なら、降った雨はいったん地面に蓄えられてじわじわと染み出していくのです。日照りが続いても川が涸れないのは、森から水が少しずつ流れていくからです。

森から流れ出す川には植物プランクトンが多く、小魚がたくさん生息します。そしてそれを食べる大きな魚もやっけます。そういう森を「魚付き林」と呼び、魚付き林のある川や海はいい漁場になっています。

こんなふうに、森は土と水と空気を作り、魚を育てています。人のくらしに必要な水を蓄えるダムでもあり、川の氾濫を防ぐ防災ダムにもなっています。

私たちはこの大きな贈り物のおかげで生きているのです。